

小さき成長記録で実感

低体重児向け母子手帳 「親の心の負担軽く」

低体重児向けの母子手帳「リトルベビーハンドブック」を作成する動きが全国で広がっている。

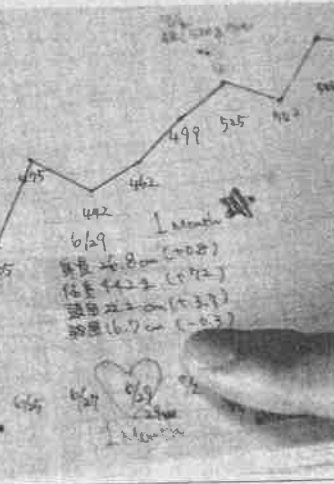
一般の母子手帳では成長記録のグラフに記入欄がない小さい身長と体重でも書き込むことができ、かかりやすい病気など健康観察の注意点も記載されている。低体重の子どもの成長を実感できるため、親の精神面での負担を緩和する効果も期待される。

「成長の記録を残したくても残せない。母子手帳を開くときを苦痛だった」。神奈川県平塚市の坂上彩さん(43)は妊娠24週目で長女(4)を緊急帝王切開で出産した。出産予定日より3カ月以上早く、長女の体重は370gだった。

母子手帳は市区町村が妊婦へ交付し、一般的に成長記録のグラフの最小値は体重1000g、身長40cm。長女の身長と体重を記す目盛りはなく、

坂上さんはノートに成長記録を自ら書き残した。坂上さんは、長女が3歳になった時に他の自治体からリトルベビーハンドブックを取り寄せた。自治体によって様式は異なるが、体重は0g、身長は20cmから成長の記録

をグラフに書き込める。低体重児を持つ家族に寄り添おうと考案されたものだ。低体重児がかりやすい呼吸器系の疾患や感染症に関する知識、授乳や離乳食のポイントのほか、親の交流サークルや自治体の相談窓口も記載されている。先輩の保護者からの励ましのメッセージも添えられている。



3人の低体重児の母親で、保護者サークル「みらいbaby」の代表を務める羽津碧さんは「ハンドブックがあることで小さい成長を喜べるようになり、親の心の負担も軽くなる」と説明する。リトルベビーハンドブックを作成しているのは、県が中心だ。2018年に静岡県が全国に先

駆けて作った。県内に住む母親らの要望を受け、低体重児を持つ保護者のサークルや医療関係者などと協議して内容を詰めた。22年3月までに64冊配られた。茨城県は10月にも、作成したハンドブックを新生児集中治療室(NICU)がある7つの医療機関に配布する予定だ。大阪府も6月、保護者

らによる要望を受けて作成を進める方針を表明している。保護者や医療従事者などを集めた検討会を進めており、今年度中にさらに24道府県が作成する見通しだ。普及に向けては必要性を周知していくことが課題となる。導入していない西日本にある自治体の担当者は「低体重児の人数が少なく、問題意識を感じていなかった」と話す。東北のある自治体は「保護者からの要望が今のところない」と説明する。

梨、静岡、愛知、岐阜、広島、福岡、佐賀の8県と一部の市がハンドブックを活用している。今年度中にさらに24道府県が作成する見通しだ。普及に向けては必要性を周知していくことが課題となる。導入していない西日本にある自治体の担当者は「低体重児の人数が少なく、問題意識を感じていなかった」と話す。東北のある自治体は「保護者からの要望が今のところない」と説明する。

坂上さんと長女(写真上、神奈川県平塚市)。ノートに書き添えられた長女の身長と体重

から巡回する同署員の動きをうかがう様子があった。段階の警戒度のうち中レベルに該当する。

能が成熟しておらず、特に出産後の嚴重な健康管理が欠かせない。2020年に15000名未満で生まれたのは約6200人で全出生児に占める割合は約0.7%だった。1980年の割合は約0.4%で、割合は高まっている。

不正請求で損、従業員を懲戒、楽天モバイル(東京)



ノーベル賞 真鍋氏 「夢中になって60年」

急搬送されたが、その後10時20分すぎに死亡した。